Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-12

巻頭言 ： 企画展から学んだもの

石田, 憲治

(Citation)
海事博物館研究年報,37

(Issue Date)
2009-03

(Resource Type)
other

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005811

巻頭言

企画展から学んだもの

海事博物館館長　石　田　憲　治

今年度の企画展と市民セミナーのテーマを「戦前、戦後のポスターに見る日本商船」とし第二次世界大戦時に海軍や陸軍に徴用された商船達の生涯を取り上げました。

全ての船ではありませんが、それぞれの船の徴用前、徴用時の写真、絵画そしてポスターを使いながら、これらの船を紹介しました。

来館者の中には徴用船と共に戦没された乗組員のご遺族がおられ該当する山田早苗コレクションの船舶行動記録からコピーをお渡しすることが出来、大変に喜ばれました。又、市民セミナーの終了後、遠路わざわざ来られたご遺族が博物館事務所で家族から聞いた昔話などをなさっておられる等、今回の企画展、市民セミナーでは特に多くのご遺族の方々と海事博物館の橋渡しが出来、身近に感じて頂けたのが大きな特徴でした。

更に先の大戦でなくなった旧神戸と東京高等商船学校卒業生の卒業年次と氏名を記したパネルも展示できました。展示した写真や絵画を通して彼らの何人かでも遺族の方々が「深江」に立ち寄って頂けると企画展の開催が一層、意義深いものとなります。

個人的には、先の大戦で「商船学校」卒業生は「兵学校」の卒業生に比して護衛もなく兵站要員として多くの諸先輩が船と共に亡くなったのではないかと被害者意識をずっと感じておりました。

10月31日に企画展を閉会し、拝借していた徴用船絵画を浜松市在住の上田毅八郎氏の自宅までお返しにうかがった折、上記の被害者感情を話しましたところ、上田氏から「当時は誰でもがお国のためにと思って闘ったんだ、ましてや戦没された人達を区別してはいかん」と諭されました。

江戸時代からの商船を主とした資料を収集、整理、保存、研究を対象としてきた海事博物館にあって専門員、ボランティアの多くが、昨年と今年度の企画展を通して無形ではありますが多くのことを学んだものと感じました。